



平和資料館 草の家 だより

No.116

2012年9月28日発行



草と草の根の連帯をあらわす
草の家のシンボルマーク

〒780-0861 高知市升形 9-11 Tel 088-875-1275 Fax 088-821-0586
E-mail: GRH@ma1.seikyoku.ne.jp http://ha1.seikyoku.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori

非国民か国民か 非人間か人間か

朝日新聞 8月30日付「論壇時評」に、作家の高橋源一郎氏が、あるテレビ番組で「尖閣諸島に香港の活動家が上陸した」というニュースのコメントを求められ「そんなことはどうでもいい問題のように思う。領土という国家が持ち出した問題のためにもっと大切な事柄が放っておかれることの方が心配だ」と答えたところ、自分のツイッターに「非国民」「国賊」「死刑だ」という罵倒と否定の言葉が数え切れないほど届いた、という内容のことを書いている。この記事を読んで私は2つのことを考えた。

なぜ、ある人々はすぐに「非国民」「国賊」という言葉を使って相手を攻撃するのだろうか。この言葉の持つ意味が理解できているのだろうかと疑う。そもそも国民とは、国とは何か。

国は国策によって国民を導こうとする。しかし、国策はしばしば国民を不幸にする。戦前、国策である満蒙開拓団送出政策によって、多大な犠牲を強いられた人々のことを忘れることはできない。また、昨年の3・11で戦後の一大国策として進められてきた原発の「安全神話」は完全に崩れ去った。

国は国民を守るために、オスプレイを沖縄に配備するのだという。しかし、絶えず墜落の危険性をもつそんなものが日本中を飛ばせば、個人の命が危険にさらされるのではないか。国のやることを疑わない「国民」でいることは危ない。

次に、「もっとほかにやるべきことがあるだろう」という指摘について。たしかにそうだ。やるべき重大なことがある時に、人々の目を他へ向けてごまかそうとするのは、

平和資料館・草の家 副館長 玉置啓子
どこの国でも為政者の常套手段である。特に「外国の脅威！」ということになると「国民は一致団結して！」となりやすい。真に人々の生活にとって大事なことが隠蔽されてしまう。

福島第一原発事故はまだ終わっていない。原発立地自治体の1つ、福島県双葉町は、仮役場を埼玉県に移し、多くの町民が避難を余儀なくされている。昨年12月16日の野田首相の事故終息宣言に対し、町長は「とんでもないこと」、「放射能の被害はまだまだ広がっているのに、収束の名の下に隠蔽されようとしている...私たちは、これから起こる健康上の被害におびえながら、避難生活を続けています...助けて下さいと、日本全体のドクターの方に援助を呼びかけたいんです。私たちは虐待されていますとアナウンスを発信したいんです」とインタビューに答えている（『DAYS JAPAN』2012年9月号、「見捨てられた町からの告発 汚染の実態」より）。他者のこのような苦痛をうけとめ、想像し、何かできることはないかと考え、何かしようとするのが人間として必要ではないだろうか。非国民より、非人間であってはならない。

それにしても、「尖閣諸島国有化」の国策は、私たちの生活を幸せにするようには見えない。政府は「日本固有の領土」と言うだけで、何の検証もせず、今後の展望も示さないし、マスコミも「中国の反発必至」と言うだけでなすすべを知らない。

必要なことは、一人一人が人間として、アジアの中で人々とうとうつきあっていけばいいのか、そこを考えることではないだろうか。

2012ピースウエイブ in こうち 各団体からの報告

第34回戦争と平和を考える資料展

7月1日の搬入では、草の家と、縁のある人達15人余が参加し、梅雨の時期で天気を心配しましたが幸い雨に降られることもなく、メンバーのトラックや自家用車総出動で、重い爆弾の残骸や「白菊」の車輪を「うんうん」言いながら運び寄せ、細かな展示品や紙の資料等を分担して積み込み、いざ出発です。

会場の自由民権記念館では、あらかじめ大まかに決めていた配置図に従って、「こんな感じでどうだろう?」「こうした方がえいがやないかえ」などと展示の仕方を工夫し合い、こだわり合いながら、皆汗を掻き掻き設営作業に取り組みました。

例年に負けぬ盛りだくさんの内容で、開催期間中(6日間)は県内外より581名の来場者がありました。



資料展会場にて、岡村館長から当時の話を聴く子供たち

今年の展示内容

年表・日本の近現代戦争小史
高知の反戦詩人・榎村浩 生誕100年特別展
高知空襲の記録
続・うちんく(わがや)にあった戦争
オスプレイ 高知でも低空飛行へ

香南市で眠っていた旧海軍巨大砲台戦争遺跡
高知城の山にあった横穴壕
広河隆一氏 パネル - フクシマ
昭和南海地震による津波の被害(資料 高知新聞)
「ヒロシマ・ナガサキ 原爆と人間」パネル

- 寄せられたアンケートの一部紹介 -

・7才の息子が学校の授業で平和集会があり、その後戦争の事に興味をもち家族でここを訪れました。…目をおおいたくなる様な写真もありましたが、戦争での体験をもっと多くの人に観てもらい、今の平和な世の中での自らの生活をもう一度見直してみようという気持ちになってほしいと思いました。(30歳)

・高知城は子供の頃よく遊んでいました。写真を見て、子供の頃に遊んでいた場所が最近になって発見された「ごう」と知りました。空襲があった場所には少なからず戦争が今も残っているのでしょうか。(43歳)

・高知空襲から67年、当時小生6歳でした。潮江地区から下知方面を見たが、当該地は火の海でございました。戦争はいけませんね。(73歳)

・私は、昭和20年は中学生(3年生)で軍人勅諭や戦陣訓を覚えさせられ、斉唱した暗く希望のない日々でした。とくに8月に入ってからは毎夜敵機来襲で、寝不足になり、栄養失調になり、恐怖と空腹の連続。遂に艦砲射撃のうわさで宇津野山の裏側の遠い親戚をたよって長浜から一家が歩いて夜中に避難したこともあり、終戦は本当にホッとした。もう二度とあんな経験はしたくありません。(81歳)